

飛耳長目

森信三先生参究誌

通巻152号 平成28年7月1日発行

「修身教授録」探求（第百十六回） 教育の力

森信三

■おざりな所業

人間というものはやるべきには全力を挙げてあるようでないダメです。二部一年に二百人余りの中、この間出してもらった感想をたった一枚、しかも殴り書きした人が5、6人ありましたが、人間もあの程度で世の中が渡れると考えていたんではダメです。そういう甘い考えでいまずと、学校はとにかくとして世の中では少しも容赦をしないですからからね。人間は常にピチピチと魚が跳ねているようではなくてはダメです。現在における諸君の提出物一つの上にも卒業後5年、10年先の諸君の姿がこもっていると云えましょう。

■現教育界の実態

現在わが国では教育はなかなか盛んなように見えますが、しかし果たして真にそうといえるでしょうか。なるほど小学校は全国の津々浦々に行き亘っており、また地方で人口の一万五千以上の町で中等学校を持たない街は少ないと言つてよい程です。これを明治維新前の状態にくらぶれば、その差は誠に霄壤（しようじよう）もただならぬと言えましょう。

■「教育の力」再考

しかしながらもう一步進めて、ひとたび現在のいわゆる学校教育なるもの内容について考えてみるならば、果たして

そこに形の上に現れているほどの大きな進歩があると言えるでしょうか。この点になると私は容易に「イエス」と言い難い感があるのであります。いやうっかりすると外形上の進歩とはまさに逆比例して、そこに教育の根本眼目が次第に失われつつあるともいえるのであります。では何がその一体その根本眼目をなすと言ふべきでありましょうか。今これを一言で申せば、今日の学校教師の多くは「教育の力」というものに対して深い信念を持っていない人が多いからではないかと思ひます。そもそも人間界のことは真実に信じ念じた事というものは、必ずやいつかは何らかの形で実現せられるものであります。もしそれが実現しなかつたとしたならば、そこには必ずやその信念において欠けるところがあり、薄弱なものがあるが存したために他ならぬでありましょう。そもそも人間、事を中途で投げ出すというのは信念の力の欠けている何よりの証拠であります。このことは試みに諸君が発明家の伝記ひとつ読んでみてもわかることでもあります。例えば野口英世博士は申すまでもありませんが、最近出たものではキュリー夫人の伝記ひとつ読んでもわかることです。いやしくも発明家と言われるほどの人の伝記を読んだならば、事の成否はひとえにその人の信念と意志力の如何に基づくことは、何人と言えども認めずにはおれない事柄であります。しかもその不撓不屈（ふとうふくつ）なる意志力、持続力はどこから

湧き出るかというに、結局それはその根本において、「この事は必ずできる。いや絶対出来るに違いない」という根本信念から湧き出するものであります。

■魂に点火すること

かくして機械一つを作り出すことさえ、その根本には絶大なる信念の力を要するのであります。しかるをいわんや人物を創り出そうとする教育においておやであります。そもそも教育という仕事は人間の魂に点火することであり、換言すれば、一人の人間を、その根底から甦がえらせるところの大業であります。したがってかくの如き大業に対しては、またまさにそれに相応しいだけの絶大なる信念の力を要するわけであります。

■根本眼目の堅持

しからばここに信念とは如何なるものをいうのでありましょうか。すなわちそれは人間の真実というものは、必ずいつかは相手の心に通じ、相手の心を揺り動かしてその深き眠りより、より醒ませしめ、ついには突き起ちあがって歩き出さずにはおれぬものである……という事柄に対する不動の確信を持つということであります。言い換えれば教育の力そのものを全身全霊を挙げて信じきるといふこととであります。この根本の信なくして、どうして眠れる人間の心が醒めましよう。そこで人間の心をその深き眠りより呼び醒ますんとするには、あたかも石地蔵に

抱きついてこれを立て起こし、また立て起こすというにも似た限りなき努力が続けられなくてはならないのであります。

■変革の緒を探す

しかるに現在の学校教育を見るに、多くはこの根本眼目が逸せられておるようであります。ですから何年学校に学んでみてもついに人間として確立する期（とき）がないのであります。これはなぜでありましょうか。要するに教育者その人が教育の力に対して十分なる信念を持たないからであります。すなわちまた人間の真実心というものに対する信を欠くが故であります。ではかような事は一体どこから生じたかという点、これは今日の学校教師の多くが自分自身に教育の力によって救われたという経験を持たないからであります。すなわち、自分がもし縁なくしてあのような卓れた方の教えを受けることができなかつたとしたならば、自分のような愚か者は今頃一体どうなっていることだろう。思うだけでもぞつとする限りである。自分のように愚かでもまた自分のようなぼんやりで、そのくせまた世俗的な名利に迷いやすい人間が、とにもかくにも今日どうやら人並みの道の見えるようになったのは、ひとえにあの先生の教えを受けたおかげである」と総じてこのような自分自身の受けた教育に対する深い感動があるならば、その人は教育の力について信じざるを得ないのであります。すなわちその人は真実

の教育がいかなるものであるかを最も如実に身をもって体験しているのであり、自分自身がその何よりの証拠物件だからであります。もしこのような自覚と経験とを持つ人なら、その努力はよし乏しくとも、そのような一筋の真実心はやがては生徒の心に染み通って次第にこれを揺るがせ始めるに相違ないのであります。

■累々たる屍が

今ひとつの例えを以て申せば、大きな広間に幾十人という人間が眠っており、自分もまたその一人であつたのが、真つ先に目覚めた人によって呼び起こされ揺り動かされ、やつと目を開けば、窓の外は既に一面の焔であるというような場合、その人はそこに眠っている人々の眠りがよし如何に深くとも、力の限り根限り呼び起こし、揺り動かさずには居られないでありましょう。いや足蹴にしてなりとも呼び起こさずにはおれないはずです。同様に真実の教育もまたまさに斯くの如き自覚によつてのみ発するものであります。思えば自分の眠りは実に深かつた。しかるに師の導きによつてかろうじて眼を開けることができたのである。自分の周囲にはかつての日の我が姿と同様な深き眠りに落ちている人々があたかも屍の累々として横たわるが如くに充満している。しかもわが国はまさに火炎に取り巻かれた大広間にも比すべき状態にある。今にして国民をその深き眠りより呼び覚ますでなければ、国家の前途誠に推して知る

べしである。総じてかくの如きものが真の教育の発動し来たる根源と思うのであります。しかるに今日の教育者には、かくのごとき痛切切実なる体験を持つ人がはなはだ乏しいようでありませぬ。これといふのも畢竟は今日の学校教育なるものが一斉授業であつて、直接「二人対一人」の関係において「いのちと命」が直（じか）に触れる機会が少ないからであります。

■衣食のためにする仕事にあらず

なお以上のことと関連して最後に一言申し添えたいと思うことは「人間衣食のために教師になつてはいけません」ということです。これを言い換えますと、人間衣食の道として学校教師となることほど、世に悲惨事はないということでありませぬ。実際これはある意味で衣食になるより悲惨だとも言えませぬ。何となればいつそ衣食にまで成り下がれば、却つて徹底して面白いところがあります。実際人間もし物質生活を欲するならば、男らしく実業界に出るがよいのです。それも生半可なサラリーマンなどにならないで、腕一本で立つ独立業者となるがよいでしょう。相場師または必ずしも妨げずです。同時にいやしくも教育者となる以上は、生徒と心中する位の覚悟でないといけません。この二度とない人生を、雀の涙ほどにも足りない小学校教師の俸給を目当てに生きるなどという事は実に情けない限りです。人間もそこにまで成り下がると

もう言うべき言葉もありません。今は存じませんが、少し前までの信州の教育者は「知事なにするものぞ」という気位を持つていたということですが、少なくともその程度の気構えがなくては、自分の教え子の中から一府県を支配する程度の人間を出す事は出来ないでしょう。私がこのようなことを言うと、諸君は「森はとてつもない大ボラを吹く」と思われるかもしれません。決してそういうわけではありませぬ。諸君……石地蔵でも2、3日これを抱いて寝れば、少しは温かくなるに相違ない。またいざりでもいつたん東京へ行こうと決心すれば行けるのです。

■最初の講義を

教育また同様であつて、諸君にして真に教育の力を確信したならば、必ずや教育の効力は挙がるものであります。このためには諸君は、まずもつて社会的な地位などというモノを打ち忘れて昂然として立ち上がらねばならない。私の申すことが本当か嘘かは「松陰全集」でテストしてごらんなさい。鋭い人なら2、3頁読めばわかりませぬ。2、3頁でわからない人は、20、30頁読めば必ずわかる。もし20、30頁でわからんのなら、一冊読み上げるんです。1冊読んでも尚わからないなら潔く教育者たることをやめるんです。そういう人は教育者には向かない人です。そもそも小学校教師の俸給や中等教育の俸給等と言うものは知れた

ものです。いやひとり小学や中学校の教師ばかりではありません。大学教授だつてその俸給はこれを独立の実用家に比べたら実に哀れなものです。そもそも俸給というものがそうしたものです。このことについてはいざれそのうち改めてお話しするつもりですが、要するに俸給というものがある人の生活の最低保障金に過ぎないものだからです。ですから先ほども申したように、人間も衣食のために小学校教師の道を選ぶところまで成り下がったんでは一切浮かばれようがありません。それこそ「お釈迦様でも」これだけはどうにもなりません。以上のことを昭和14年の最初の時間であるこの時間に申しておきますから、諸君は私の申すほかのことは皆忘れるとしても、せめてこの一事だけは忘れぬように希（ねが）いたいです。（森井幸夫記）

（修身教授録第三巻昭和18年9月 同志同行社刊）

敗戦満5年を迎えて

（微言）

森信三

○敗戦満5年を迎える。時運ようやく周囲（め）ぐり来つて国家自立の一步を踏み出す年となりそうである。ここにそうであるというのには、具体的には講話条約の締結を見ねば確定的な事は言えないからである。

○しかし時運の周りは結局遅速の違いだけで、必ずや「窮すれば通ず」との易理の眞理性は、地上のいかなるものもこ

れを否定し得るものはない。

○我等はかつて敗戦直後「日本管理五十年案」なるものが、度々新聞紙上に散見するのを見せしめられた。しかしその都度厳肅なる歴史的真理を知らざるものと感を感じ得なかつた。

○世界史上敵国管理が50年継続せられたという事実が果たして一度でもあつたであらうか。地上のいかなる事実も不滅の足跡を世界史の上に刻みつつあることを思う時、50年の将来を断言するということとは、真に民族的自負を有(も)つもの容易に為し得ないことではあるまいか。

○爾後5年を経過せざるに、如上の考えを持つた国々自身が二分分裂を来たしつある現状は、ただただ神意の厳肅なる開頭(かいけん)と言う以外に全く表現のしようはあるまい。

○過ぐる太平洋戦における我等の過誤(かご)はまことに重大であつた。我々は今日なおその瘡痕(そうい)のただ中にあつて、日々これを厳烈なる神の審判として享(う)けつつある。しかし神意の開頭にはついに尽期なきことを知らねばならぬ。

○古来あらゆる学説の誤謬は自らの思想を世界最終の学説と自僭(じせん)した点にある。その点ではヘーゲルもマルクスも全く同種の誤謬を犯せるものといつてよい。

○同時にこの誤謬は一人学説のみではなく、現実に対する判断においてもまた同様である。「時運の周(まわ)り」という神意開

頭の必然を無視したいかなる言説も政策も、いつかは自らの矛盾を露呈すべき時が来る。

○今日我等の民族にとつて最要なる事は、過ぐる太平洋戦に対する過誤への徹底的反省によつて、神意に触れるとともに、民族として神を信ずる最強の民族として起ち上がることであらう。

○もちろんここに神を信ずる民族となるとは、民族神観の否定的超克による唯一真神への信仰をいうのであつて、太平洋戦の最深の因となつた民族神観への復帰を言うでない事は改めて断るまでもない。

○真に神を信ずる個人の強いように、誠に神を信ずる民族は強い。しかも今日地上の民族として真に神を信ずるものがない事は、原爆の威力がこれほどまでに分明になりつつある今日、我等にならつて「武装の全的放棄」を敢行する一つの国家民族もない一事によつて明白である。

○今日我等の民族にとつて最要必須のことは、断じて単なる講和条約でないことを知らねばならぬ。講和条約の如きは「時運の周(まわ)り」に委せておいてよいことであらう。何となれば時来たれば神これを為し給うが故である。

○今日我等の民族にとつて最要の自己要請は、神を信ずることにより、世界最強の民族としての一步を踏み出すことである。しかしそのためには我等は何よりも民族としての反省に徹するの要がある。

すなわち太平洋戦争の過誤に対する徹底的反省である。

○しかし真に自らの否定に徹したものは真理に達する者が、見えざる真理の刃をもつて、神によつて斬られゆく必然を透察(とうさつ)する明を、神自身によつて付与せられる恩寵に欲するのである。

(昭和25年1月5日「開頭」1月号通巻34号) かつて「神国日本は絶対に神の御加護ありて、負けることはない。」の信仰?が二回の蒙古襲来を神の力で一蹴したという体験で曲がった神観が生まれた、との反省であれば心当たる。)

あとがきに替えて

教育は「魂への点火である」。森信三先生の箴言の一つではあるが、その体験なくして教壇に立つな!という教えは鬼気迫る。しかしこれだけでなくは国家の維持発展は望めない。この「魂への点火」は学校教師のみならず、実は国家の指導者やなど導く立場にある人々へもその資質が期待されるのである。ここに衣食のため、あるいは私服を肥やすよこしまな考えが巣くうと問題を起す政治家などが出るのである。総ては人としての真つ当な教育、学習を経て健全な地域、集団を創つていかねばならぬ。(29日二繁)

〒633-0003

桜井市朝倉台東2-538-89

臂 繁二

電話0744-4513422

Email:hj3@ken.jp

http://web1.ken.jp/syushn